式　辞

温暖な瀬戸内にある本学キャンパスにも雪の舞うことが幾度かありました。寒かった今年の冬もようやく終わりを告げ、桜の開花も間近い龍王山から望む周防灘も春めいて、暖かい日差しが心地よく感じられる季節となりました。

本日、山口東京理科大学工学部並びに大学院工学研究科の所定の課程を修了された皆さん、誠におめでとうございます。また、皆さんを物心両面で支えてこられ、今日の良き日をともにお迎えになられているご家族の皆様にも、心よりお祝い申し上げます。

また、本日、ご多忙の中、ご臨席を賜りました、ご来賓の皆様に、本学を代表致しまして心より御礼申し上げます。

大学や大学院に入学してから卒業までの歳月は、短くもあり、長くもあります。両方の思いに、今は浸られているのではないでしょうか。この大学生活の間に皆さんは大き

く変わりました。入学以来、皆さんを目のあたりにしてきた私自身、皆さんの物事を観る視野の広がり、知識や知恵の深まりを感じます、それらは、皆さんの真摯に学ぶ行動や人とのつながりを通して、もたらされたものだと思います。本学が、皆さんの成長に少しでも貢献できたならば、これ以上の喜びはありません。

そして、皆さん自身だけでなく、大学や社会を取り巻く環境も、入学したころとは大きく変わってきています。地球環境の破壊が進む中、様々な地域が自然災害に見舞われ、未曽有という、いまわしい表現が多用されるようになったのもこの数年です。政治や宗教の対立や地域格差、中東やアジアの緊張、大規模テロの頻発や悲惨な爆撃により多くの犠牲者が出ています。一方で、世界的な金融不安や大国の保護主義の高まりは、人類社会に複雑さと深刻さをもたらしています。皆さんを卒業生として社会に送り出すに際し、今の時代の状況の難しさを思うにつけ、心が痛みます。

どうか、ここで学んだ工学や科学技術の知識をちからに、あらゆる困難に正面から立ち向かい、それぞれの目的に向

かって邁進してほしいと願っております。日本経済が、現在の混沌とした状態から抜け出し、希望ある未来に向かって復活、成長できる鍵は、まさにその原動力となる科学技術の力にあり、この変革期に即応できる能力を持った人材にあると言っても過言ではありません。教職員の立場を超えて、私は、負けるな、がんばれと心より願うものであります。

さて、本日の学位記授与式に当たり、学部や大学院での日々を共に学び抜いた、一教員として、さらには、社会の先輩として、学び舎を後にする若者に必ず伝えておきたいことをふたつ述べさせていただきたいと思います。

申し上げたいことのひとつは、「学んだ工学や科学技術に自信をもって生きなさい」ということです。

省みれば、卒業生の皆さんの多くがこの大学に入学したのは二〇十一年三月十一日に、東日本が大震災に見舞われ、二万人近い人の尊い命が失われた日から、二年後の頃でし

た。私もまた、北関東で被害をこうむり、直後にこちらに参りました。その後も、津波による災害と原子力発電所の事故は人々の生活に大きな影を落とし、六年たった今も、十二万人以上という山陽小野田市の人口の二倍にあたる人たちが避難生活を余儀なくされております。行方不明の方も二千五百人以上おります。しかし、津波にも人々の心までは流されず、多くの人たちが支えあい、励ましあって復興の努力を続けておりますことは日本人としての誇りです。

当時の学生の皆さんの中には、いたたまれず、東北に赴いたり、万感の思いで支援のすべを求め、休学を申し出た人もおりました。事情で志が叶わず、涙をながして訴えた学生もおりました。私たち教職員は、その思いを胸に、将来はこうした忌わしい災害を未然に防ぎ、あるいは最小限の被害に抑えることができるように、工学の知識や科学技術を学ぶことこそが、今、私たちにできる最大の対応であるとしか言えませんでした。

皆さんが在学した年月にも、世界や日本の国土、山口県

や近隣の島根、広島県、そして熊本や鳥取県でも、多くの天災、人災に関わる出来事が起こり、いくら科学技術を学んでも、工学で制御できない現実の世界に裏切られることが多かったのですが、皆さんの学ぶ姿勢は断じて揺るがないものであったことを誇りに思います。

震災の直後から、世間では多くの文化人や科学技術を職業とする人たちまでもが、科学技術の無力を語り、その否定まで言われました。もはや、科学技術は信じられないと。残念なことに、六年を経た今でも、そうした風潮は変わりません。

確かに科学技術や工学は万能ではなく、その使い方や限界を見誤ると、戦争や人類の破滅にもつながりかねません。私たち教員は、いつも人間としての教養や感性を磨くことの重要性を語り続けてきました。専門知識だけを身につければよいというものではありません。如何に科学知識や研究の成果を正しく用いるかの判断能力や倫理性こそが、今こそ大事なのです。

皆さんは、理工学の知識を学んだものとして、それをよりどころとして、これから社会で生きていかなければならないのです。どうか、科学技術や工学の力を信じて自信をもってください。地震を予知し、津波に備え、原子力の課題を明らかにして、いつの日か問題を克服して解決を図るのは我々、工学や理学に携わる者、研究者や技術者のつとめに他なりません。科学技術に裏付けられた正論こそ私たちの行動指針なのです。社会に出て、ぜひ、それぞれの学科や研究科で学んだことに自信をもち、正しい道を求め続けてください。時には周りに受け入れられないこともあるかもしれませんが、正しいと信じる道を貫いてください。思いは通じるものです。この地で百六十年も前に若者に希望を持てる教育を行った、吉田松陰先生の示された、しせいてんにつうず、の精神です。誠意を尽くせば、必ず人々の心は動かせるのです。

私が今日、申し上げておかねばならない、もうひとつのことは、「生涯、学び続けなさい」ということです。

ご卒業というおめでたい席に水をさすようで心苦しいですが、卒業といっても、たかが大学の卒業に過ぎません。

人類が長い時間を経て、今、豊かな文明を享受できているのは、地球環境に適合した生物学的な進化もありますが、同時にたゆまぬ知識の蓄積があったからです。その進化の最前線にいる私たちこそ、新しい知識を学び、蓄え続けることを怠ってはなりません。学ぶことをやめたときが人類文明の終焉であります。皆さんは最高学府まで学び続け、今、ひとつの区切りを迎えたわけですが、学びに卒業はないのです。人は一生、学ぶべき使命をおっているのです。私が申し上げます、学ぶとは、大学や大学院で学ぶ専門知識や技術だけではありません。あらゆるものごとを対象とします。あらゆる場で、あらゆることから、あらゆる人から、学び続けてください。

私自身、半世紀近く前に大学を卒業させていただきました。決して優秀でもなければ勤勉な学生でもなく、大学卒

業とは名ばかりで、仕事に就いた途端から何もわからず面食らったのを思い出すと、今でも、冷や汗が出ます。社会に出てから多くの方々から仕事を通じて学び、追い詰められた気持で自分でも知識や技術の習得に励みました。昼間聞いたことが分からないのが悔しくて、仕事の帰りに専門書を買い求め、徹夜して読んだことが数えきれないほどありました。必要に迫られて必死で身に着けたものこそが本物の知識です。そして、今でも、生きている毎日が、私にとっての学びの場です。

世の中にはいろいろな事情により大学で学ぶことのできない人たちがたくさんいます。私たちの身の回りにもおります。七十数億人といわれている人類からすれば、大学で学ぶ、恵まれた人はほんの少数です。したがって、知識を身に着け自分を高めるところを大学と言うのでしたら、多くの人にとっての大学とは自分のいる場所であり、組織であり、会社であり、家庭であり、社会そのものなのです。どうか、皆さん、ひとりひとりが属する社会の組織を、これからは大学と思い、いつか、そこを卒業するつもりで励

んでください。

本学や市内で催している様々な講演会や研修会でも、ご年配の方が一生懸命、学ばれていたり、作業服姿の青年の真剣なまなざしに圧倒されることがあります。大学卒業などの学歴で人を判断してはいけません。どんなに世間の知名度の高い大学を出た人でも学ぶ姿勢を忘れた人は失格です。学歴がなくとも社会という大学で研鑽をつまれた、立派な方が身の回りにも大勢いらっしゃいます。ぜひ、これからは、周りの方々を師と思い、社会で学んで本物の大学の卒業を目指してください。

本日は、人生、ひとつ目の大学の卒業です。

されど、このひとつ目の大学こそ、人生で最も多感で重要な時期を過ごした、去りがたき場所です。これからいろいろなことがあるでしょう。苦しいとき、つらいときには理科大での学びの日々や、かけがえのない友人のことを思い出して勇気を奮い立たせてください。素晴らしいことに巡り合えた時には、私たちを思い出して、少しだけ、その

おすそ分けを運んできてください。いつでも私たちは皆さんのことを待っています。ここは皆さんのかけがえのない母校なのですから。

その母校ですが、皆さんの在学したこの四年間は、大きな転換の時期でした。平成二十六年十二月に、学校法人東京理科大学と山陽小野田市が本学の公立大学法人化に合意、平成二十七年八月に公立大学法人設立の申請を行い、同年十二月に公立化の認可を頂き、平成二十八年四月に公立大学に移行いたしました。この大学の存続を願う多くの方々のまさに献身的なご支援、ご努力があったからこそ今の本学があることを私たちは決して忘れることはないでしょう。

そして、大学の教育姿勢は、設立母体が変わるという大きな変化の中でも、微塵も揺らがず、真摯に皆さんの勉学意欲に応えました。学ぶ皆さんも、よく修学してくれました。そして、今、更なる本学の改革が進んでおります。来年四月に開学予定の薬学部の校舎を建設するべく、かつてのテニスコートやグランドに槌音が響き渡っております。

キャンパスの青い空を見上げると、天を突き刺すようなボーリング用のクレーンが何基も並び、土台の建設に当たっております。しばらくは新しい校舎の完成まで、本学関係者は心穏やかならぬ時をすごすことになるかもしれませんが、皆さんの後輩は皆さんがそうであったように、環境の変化をものともせず、本学の学生の代名詞であります、やさしさとひたむきさをもって、たくましく、学んでくれることでしょう。

いつまでもこの大学を忘れないでください。この懐かしい土地を忘れないでください。きららビーチの心洗われる夕日、龍王山から見た山陽小野田の穏やかな街並みを忘れないでください。暖かく、皆さんを見守り、育ててくださった地元の方々を忘れないでください。旅の果てにこの地に毎年戻ってきてくれる愛おしい旅する蝶、アサギマダラのように、いっとき遠く離れて行く人も、やがて、この地に戻ってこられる日を心待ちにしております。

それでは、大変、おなごり惜しいですが、最後に、ここ

にいらっしゃるすべての皆様のこれからの、さらなるご活躍をお祈りして、式辞を終えることといたします。

平成二十九年三月十八日

山陽小野田市立山口東京理科大学長　森　田　廣